股

難ヲ經サセ給ヘバ、御身モ草臥ハテ、流ル、汗如水、御足ハ欲損シテ、草鞋皆血ニ染レリ、御伴ノ人々モ、皆其身鐵石ニ非レバ、皆飢疲レテ、ハカ〳〵敷モ、歩得ザリケレ共、御腰ヲ推、御手ヲ挽テ、路ノ程十三日ニ、十津河ヘゾ著セ給ヒケル、

〔太平記十八〕越前府軍幷金崎後攻事

葉原ヨリ深雪ヲ分テ重鎧ニ肩ヲヒケル者共、數刻ノ合戰ニ入替ル勢モナク戰疲レケレバ、返サントスルニ力盡キ、引ントスルニ足タユミヌ、サレバ此彼ニ引延テ、腹ヲ切者數ヲ不知、

〔伊呂波字類抄奴人體〕蹐ヌキアシ、脛旋行也、

〔詩經下小雅正月〕謂天蓋高、不敢不局、謂地蓋厚、不敢不蹐、

○按ズルニ、蹐ノ傍訓ハ道春點本ニ據ル、

〔松屋筆記八十五〕ぬけ足

安元御賀記群書類從五百廿九卷、十一丁左、に、我もとへ鞠くれば、ぬけあしをふみてにげられき云々、今俗ぬき足といへり、加賀見山といへる淨瑠璃本に、ぬきあしさし足とあり、おとせぬやうに脫足する也、

〔貞丈雜記一禮法〕一今時貴人の御前へ參る時、送足と云足づかひをする人あり、其足づかひは、太刀目錄、又盃、其の外何にても持て參る時、御前の敷居際までは、常の如く歩み來て片足を上げ、敷居を越さうにして越ず、其足を引て、ふみなほして、扨敷居を越る也、是を送足と名付て、專ら稽古する人有、

〔新撰字鏡肉〕胯苦故反、股也、人乃毛々、

〔倭名類聚抄三手足〕股　唐韻云、髀傍禮反、上聲之重與膞同、辨色立成云、團股、毛々、股也、胠公戶反、上聲、古文股字也、

〔箋注倭名類聚抄二手足〕山田本、曲直瀨本、陛作髀、那波本同、按髀髀同字、陛髀同音、此作陛爲是、曲直瀨本、下總本、圍髀作團髀、與類聚名義抄合、那波本作圍股、刻版本作團股、未知孰是、醫心方脛同訓、